

# ヨーガ学派の量論

## ——直接知覚について——

山下 幸一

### 一 はじめに

正しい認識手段(pramāṇa 量)に関する議論は、インドにおける各学派が避けて通れなかつた問題の一つである。本稿では、パタンジャリ(Patāṅjali)を開祖とするヨーガ学派の量論(pramāṇa-vāda)、特に直接知覚(pratyakṣa)についての考え方を明らかにしたい。

### 二 ヨーガ・スートラの量論

ヨーガ学派の所依の根本經典、スーガ・スートラ(YS)は、心作用を止滅して、プルシャの独存を獲得することを、その基本的立場とする。従つて、最古のヴィヤーサ(Vyāsa)の註釈(Yogasūtra-bhāṣya, YBh.)においても同様に、いわゆるニヤヤー的論理を詳説しはしない。実にYSは、認識手段(pramāṇa)を、顛倒・分別・睡眠・憶念とともに、五種の心作用の一つ

に数えあげる(YS.1.6)にすぎない。そして、《認識手段とは、直接知覚と推論と聖なる教えである》(YS.1.7)と説く。

認識手段を三種とするのは、サーンキヤ学派と同じである。が、それを止滅さるべき心作用に含めている点に、ヨーガ学派の独自性を認めることができるであろう。YSは上述の外に認識手段について説くところがない。よつて、はじめに本稿の意図とした直接知覚を註釈を頼りに見てゆこう。

### 三 直接知覚

YS.1.7において説示された直接知覚(Pratyakṣa)をヴィヤーサは次のように定義する——

△直接知覚なる認識手段は、感官という通路による、心が外的事物によつて色(じく)くことにもつく、それを対境とする作用で、普遍(samanya)と特殊(viśeṣa)とを本性とする対象に関して、特殊の確定(avadharaṇa)を主とする作用である。(YBh.1.7)

と。これについて、「確定 (avadhāraṇa)」ということが問題になる。なぜなら、それがひいては直接知覚に分別性の有無を自覚していたか否かに関わってくるからである。

ここで、分別 (vikalpa) とは何か。それをあらかじめ明確にしておこう。YS. I. 9 に《分別とは、語と知識とに従つたもので、事物の空虚なものである。》と定義づけられている。

ヴィヤーサは、認識手段でも顛倒でもない、と註釈している。これからすると、直接知覚と分別とは全く別異だということになる。が果して、そうであろうか。この点について、ヴィヤーサが八世間的な直接知覚 (lokapratyakṣa, YBh. I. 49) と、八最高の直接知覚 (parampratyakṣam YBh. I. 43 intro.) という言葉を用いていることを看過できない。通常の認識という事態が成立する場合は心 (citta) であるが、それを明らかにする YS. W. 23 を、ヴァーチャスパティ・ミシュラが復註 Tattvavaiśaradī (TV) において、世間的直接知覚を権証するものだとすることも同列である。

#### 四 三昧における智慧と対象

さて、右の二つの直接知覚は、三昧における智慧ということから問題になる。三昧における智慧については、YS. I. 49 に《伝承と推論による智慧とは別のものを対象とする。特殊 (viśeṣa) を対象とするから。》と説かれる。ヴィヤーサが先

に、直接知覚を対象の特殊を確定する作用だとしたのは、これに関係がある。彼は、この YS. I. 49 に対しても、伝承や推論にもとづく認識は普遍 (sāmānya) を対象とするけれども、三昧における智慧は特殊を対象とする、と言つて、YS. I. 7 におけると同様の註釈を施し、更には、その対象は世間的直接知覚によつて把握されないとしている（後述）。

ここで、特殊を確定する直接知覚における「特殊」と、特殊を対象とする三昧智における「特殊」とは同じものか否か、それが問題になる。結論を先取りして言うと、両者は異つてゐる。直接知覚が確定する特殊は、対象に色づけられた心が、対象と同じ形相 (ākāra) もつてゐる (YBh. W. 17, 23; TV. W. 17, I. 7) から、対象の個別相である。すなわち、おそらくはディグナーガの説く共相 (sāmānya-lakṣaṇa) に対する自相 (sva-lakṣaṇa) にヒントを得たであろう、普遍に対する特殊という意味においてである。他方、三昧智が対象とする特殊は、粗大に対する微細、サーキヤ流に言えば、五大に対する五唯という意味においてである。

三昧の智慧と対象との関係の詳細は、有種子三昧の四つの等至 (samāpatti, YS. I. 41~50) において取扱かわれるので、以下にそれについて考察しよう。

## 五 等至における対象

等至の一般的定義は Ys. I. 41 において、「《作用の減した「心」には、美しい寶石がそうであるように、把握者と把握作用と把握される物とにおいて、それ(三の中の一つ)に住し、それに色づいた等至がある》となされる。今は、把握される物すなわち外的対象と心との関係が、当面の問題である。

ヴィヤーサは、それについて次のように註釈する。《把握される所縁に色づけられた心は、把握される物に合致し、把握される物の本性を形相として顕現する。》更に把握される物の形状の大小にもとづいて、《微細な物質元素に色づいた「心」は、微細な元素に合致し、微細な元素の本性をとつて顕現する。それと同様に、粗大な所縁に色づいた「心」は、粗大な形に……。それと同様に、万物の差異に色づいた「心」は、万物の差異に……。》と言われている。ヴァーチャスパティによると、「万物の差異」とは、牛や瓶などのことで、個物の個別相を意味しているようである。これら対象についての個別相、粗大な形、微細な元素という面から、四つの等至が説明されるわけである。

まず第一に、有尋等至は Ys. I. 42 (訳文略) に定義される。それによると有尋等至においては、対象そのものが心に確立することなく、分別(vikalpa)すなわち概念的構想が混入して

いる。従つて、これは五種の心作用のうちの分別とおよび認識手段の推論・聖典にもとづいている。そして、事物の個別相と粗大なもの即ち五大(Ybh. I. 17, 45, II. 19, III. 44; TV. I. 17)とをその対象とするということになる。ヴァーチャスパティは、これを「低位の直接知覚(aparampratyaksam)」と呼んでいる。

第二に、無尋等至は Ys. I. 43 (訳文略) に定義される。ヴィヤーサの註釈によれば、この無尋等至は、言葉による意味規定から憶念(smṛti)が完全に浄化され、聖典や推論の知識による分別のない三昧智であつて、そこにおいて対象がそれ自身の姿でもつて他から区別されるのである。彼はこれを入最高の直接知覚(parampratyaksam)であり入伝承と推論との種子√だとしている。これに関してヴァーチャスパティは、「無分別の直接知覚によつて把握してから、分別して示し伝える。」と言う。そのようなことから、無尋等至が無分別の直接知覚で、有尋等至が有分別の直接知覚だと言うことができるであろう。しかし、それもヴァーチャスパティ以前に明白に自確されていたか否かは疑問である。

さて、微細な元素すなわち五唯(tamatra, Ybh. I. 7, 45, II. 49, III. 44; TV. I. 17)は通常の認識対象にならない。ヴィヤーサは直接知覚の限界について、《しかし、この微細で、覆われた、遠くにある事物については、世間的直接知覚による把握

はなら) (YBh. I. 49) と言いつ、第三、第四の有伺・無伺等至の対象が微細元素に属する特殊 (YBh. I. 49) であることを明らかにしている。かくて、YS. I. 44 (訳文略) において、有尋・無尋の分け方を、有伺・無伺に同じ様に適用することが説かれる。すなわち有尋・無尋と有伺・無伺の差異は、対象の粗大か微細かに由るのである (YBh. I. 44)。そして、尋・伺の有・無は、要するに分別があるか否かによつて分けられている。この分け方の基準は、ヴァーチャスパティが、有伺等至にも「言葉の意味の」規定と憶念とによる聖教、推論の知識の分別が混ざっていること」(TY. I. 44) を認めることから明らかにである。

## 六 おわりに

YS. は、直接知覚を含む認識手段を、五種の心作用の一つに数える。そして、それは止滅されるべきものである。他方、四つの等至は心作用が止滅したときに得られるとされる (YS. I. 44) のであるから、YS. の体系においては、認識手段 (今は直接知覚) と等至とは次元が違うと考えられている、と見るべきかもしれない。

しかしながら、有尋等至に、ひいては有伺等至に有分別性を認めていることから、直接知覚(広くは心作用一般)との関係という点にあまり残っていることを否定できない。こ

の点、ヴィヤーサは、有尋・無尋等至を(世間的な直接知覚)だとし、この中(前者を「低位の直接知覚」[LV] 後者を「最高の直接知覚」V) だとし、会通している。この二つの等至の対象は、個物の普遍相に対する個別相、五大であつて、無尋等至において無分別である。

有伺・無伺等至においては、世間的直接知覚の対象とならない、微細元素すなわち五唯がその対象となる。そして無伺等至が無分別である。ここにわれわれはヨーガ行者の直接知覚 (yogi-pratyakṣa) が予想されていると考えてもよいであろう。

以上の考察から、註釈家が明らかに四つの等至を直接知覚との関連において理解していることを知るのである。すなわち、四つの等至つまり、有種子三昧は、対象に結びつく心作用の止滅の段階を表わしている。第四の無伺等至の浄化 (śuci) において、知慧は真理を帯びる (YS. I. 48)。この知慧が伝承・推論の知慧とは異なる対境をもつ (YS. I. 49) 以上、それはやはり或る種の直接知覚のようなものだと考えられる。YS. I. 51 は、それをも止滅した上に、無種子三昧を宣揚するのである。

ヨーガ学派は、仏教から借用した「等至」を、自己の体系において、有種子三昧とし、その上に更に無種子三昧をたてて、自派の優秀を示しているようである。(大谷大学特別研究員)